

実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅳ

—保育者の勤務先による特徴の検討から—

高橋美枝・前徳明子

The Role of Junior College for Bringing up to a Practical Nursery Teacher and a Practical Kindergarten Teacher IV :From A Study of Distinction between Teachers' Employers

TAKAHASHI Mie, MAETOKU Akiko

キーワード：実践力、保育所、幼稚園、認定こども園、社会福祉施設（保育所を除く）、質問紙調査

はじめに

乳幼児期における保育・教育は、子どもの健全な心身の発達、生涯にわたる人格形成の基盤を培う重要なものである。また、地域における子育て支援の必要性も増大している。その中で、専門性を有する保育者の担う役割はより大きなものとなってきている。このような役割を果たすことができる保育者に成長していくことができる人材の輩出が、保育者養成校の課題と言える。

前徳明子・高橋美枝（2018）¹⁾は、実践力のある保育者の育成において必要とされる能力、資質とその育成における養成校である短期大学の役割について、学士課程教育に求められる諸能力と保育者にふさわしい資質、能力を総合的に概観することから検討した。そして、前徳明子・高橋美枝（2019）²⁾では、保育者自身を対象としたインタビューから、保育者に必要な資質、保育者としての成長のプロセスを検討し、実践力のある保育者に必要とされる能力、資質とその育成プロセス及び短期大学の役割を明らかにした。

さらに、前徳明子・高橋美枝（2020）³⁾においては、現役の保育者を対象とした質問紙調査とし

て、保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力及び保育者養成校において育成する実践力についての調査を実施した。保育者としての実践力として96.4%の保育者が「子どもが好きという気持ち」をあげていた。この項目は、保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力との差が見られなかった。養成校の教育では、「保育技術」「基礎となる知識、理論」「マナーや文章力の基礎力」「前向きな姿勢、態度」が実践力として期待されていることが明らかになった。

この研究においては、保育所、幼稚園、認定こども園、施設とさまざまな現場で勤務している保育者を対象とし、全調査対象者のデータを元に分析を行った。さらに、本研究においては、勤務先による実践力についての意識の違いを検討する。

目的

保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力と、新任保育者として保育、幼児教育の仕事に就く上で、保育者養成校において育成が必要な実践力について、勤務先ごとの保育者の意識の特徴を明らかにすることを本研究の目的とする。

表1 質問項目の内容

方法

1. 調査対象

前徳明子・高橋美枝 (2020)³⁾ (前掲) における調査データを研究対象とした。幼稚園に勤務する幼稚園教諭、保育所に勤務する保育士、幼保連携型認定こども園に勤務する保育教諭、保育所以外の福祉施設に勤務する保育士に質問紙調査への協力を要請し、481名から質問紙の回答が得られた。このうち、保育者ではない、または保育者であることが確認できない7名及び欠損データのある49名のデータを除き、425名の回答内容を検討対象とした。

この425名の在職している園、施設別の調査対象者の人数は、保育所が372名、幼稚園が28名、認定こども園が13名、施設が12名であった。保育所勤務の保育者が他に比べて非常に多いことから、サイズをそろえて検定を実施する必要があるため、保育所勤務者372名から無作為で28名を抽出した。無作為抽出は、エクセルのランダム関数を用いて乱数を発生させ、保育所勤務者のデータに乱数を付与し、その小さい順に28名を抽出する方法により実施した。

このように、保育所勤務者28名(保育園群)、幼稚園勤務者28名(幼稚園群)、認定こども園勤務者13名(認定こども園群)、保育所以外の施設勤務者12名(施設群)のデータについて検討した。

2. 質問紙の項目

前徳明子・高橋美枝 (2020)³⁾ (前掲) における質問紙の構成は、Ⅰ プロフィールを尋ねる項目、Ⅱ 保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力、Ⅲ 新任保育者として保育、幼児教育の仕事に就く上で、保育者養成校において育成する実践力の3部である。

ⅡとⅢの質問項目は、結果の比較ができるように質問内容を同一とし、「とても当てはまる」を5、「やや当てはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまり当てはまらない」を2、

	質問内容
1	ピアノの弾き歌い
2	嘔吐や便の処理
3	保育の流れの理解
4	同僚との関係づくり
5	保護者への対応
6	指導案の立て方
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築
8	子どもとの関わり
9	クラスをどうまとめるか
10	手遊び
11	感染症の知識と対応
12	会議の進め方
13	マナー
14	ペープサートやパネルシアター
15	積極的な姿勢
16	あいさつ
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方
18	文章力
19	時間の管理
20	記録の作成の仕方
21	掃除の仕方
22	言葉遣い
23	子どもへの声掛け
24	障がいについての理解
25	わからないことを聞く姿勢
26	製作のアイデア
27	教育制度や法律の理解
28	子どもが好きという気持ち
29	保育者自身の健康管理
30	判断力
31	アレルギーへの対応
32	保護者相談の技術
33	子どもの発達の理解
34	事務処理能力
35	食や栄養の知識と関心
36	コミュニケーション力
37	状況を把握する力
38	返事
39	柔軟な対応力
40	自分の意見が言える
41	笑顔と明るさ
42	児童福祉制度や法律の理解
43	保護者の立場に立った言葉選び
44	周囲への配慮
45	責任感
46	フットワーク
47	発信力
48	向上心
49	臨機応変の対応力
50	見通しをもった保育力

「全然当てはまらない」を1とする5件法である。質問項目の内容は次のとおりである（表1）。

倫理的配慮

調査にあたっては、学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究調査の主旨、調査データの扱いや個人情報の保護に関して書面で説明し、同意の得られた場合に質問紙への回答をお願いした。調査内容については、個人情報を保護するとともに、情報漏洩の防止に十分配慮し、個人が特定されることのないように配慮した。

結果

1. 分析方法

保育者に必要な実践力の50項目、養成校において育成が必要な実践力の50項目のそれぞれについて、保育所、幼稚園、認定こども園、福祉施設の勤務先による項目得点の差があるかについて検討を行う。前徳明子・高橋美枝（2020）³⁾（前掲）において既に各得点が等分散でないことが確認された。そこで、ノンパラメトリックな手法であるKruskal-Wallis検定を使用することとした。

勤務先により「保育園群」「幼稚園群」「認定こども園群」「施設群」の4群間で各項目の中央値の差があるかどうかの検定を行う。検定結果の指標は有意確率のp値を用い、有意水準5%で帰無仮説の棄却を検討した。分析にはSPSSを使用した。

2. 保育者に必要な実践力における勤務先による保育者の意識の特徴

保育者に必要な実践力についての各項目の回答について、勤務先により「保育園群」「幼稚園群」「認定こども園群」「施設群」の4群を独立変数とするKruskal-Wallis検定を行った。有意確率5%水準で帰無仮説が棄却された項目は50項目中、「ピアノの弾き歌い」「子どもとの関わり」

「クラスをどうまとめるか」「文章力」「時間の管理」「障がいについての理解」の6項目であった。項目ごとのp値と中央値を表2に示した。

表2 保育者に必要な実践力の4群の差についてのKruskal-Wallis検定の結果

	項目内容	p 値	中央値
項目1	ピアノの弾き歌い	.000***	4.00
項目8	子どもとの関わり	.045*	5.00
項目9	クラスをどうまとめるか	.035*	5.00
項目18	文章力	.032*	4.00
項目19	時間の管理	.015*	5.00
項目24	障がいについての理解	.046*	5.00

※ p ≤ .001 は***, p ≤ .01 は**, p ≤ .05 は*を付す。

Kruskal-Wallis検定の結果に差が認められるということは、4つの群においていずれかが中央値間の統計的に有意な差を有することを示している。有意差が認められた6項目について得点分布を比較して特徴を検討した（図1～図6）。

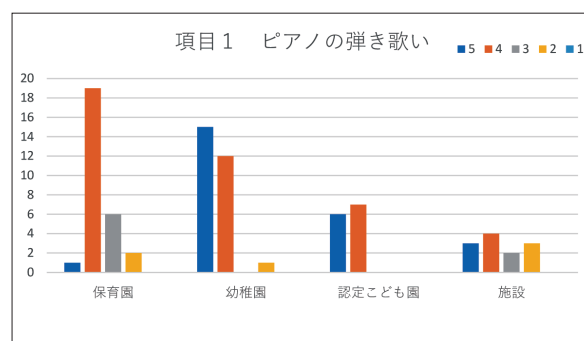


図1 保育者に必要な実践力「ピアノの弾き歌い」の勤務先ごとの度数分布

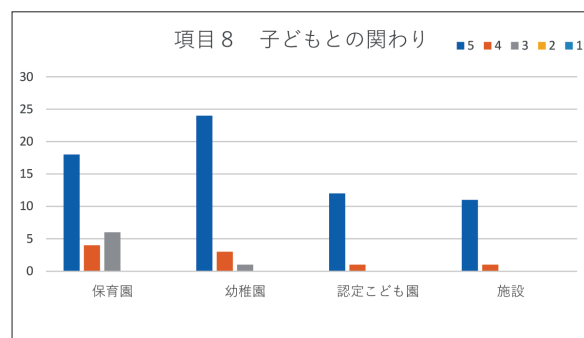


図2 保育者に必要な実践力「子どもとの関わり」の勤務先ごとの度数分布

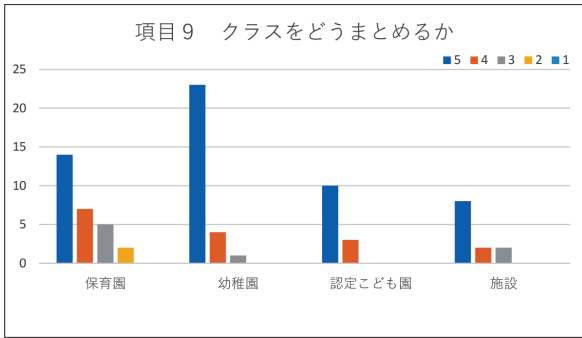


図3 保育者に必要な実践力「クラスをどうまとめるか」の勤務先ごとの度数分布

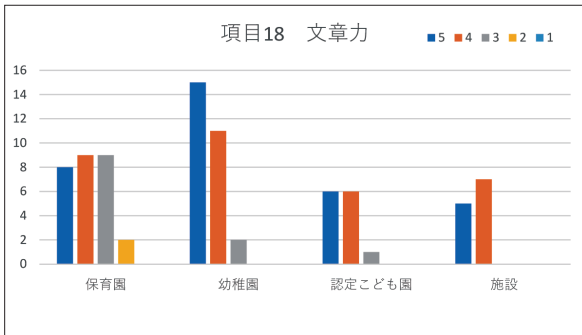


図4 保育者に必要な実践力「文章力」の勤務先ごとの度数分布

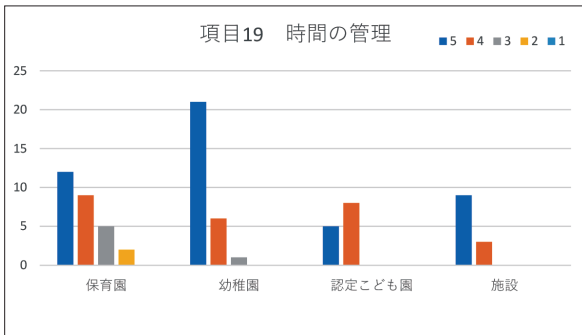


図5 保育者に必要な実践力「時間の管理」の勤務先ごとの度数分布

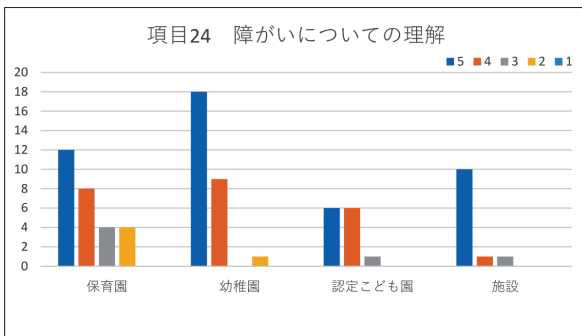


図6 保育者に必要な実践力「障害についての理解」の勤務先ごとの度数分布

図1より、「ピアノの弾き歌い」は幼稚園、認定こども園においては、保育者に必要な実践力に「とても当てはまる」「やや当てはまる」の回答が多かった。それに対して、保育園においては、「とても当てはまる」の回答は少なく、「やや当てはまる」の回答が多かった。施設では「とても当てはまる」から「あまり当てはまらない」に回答が分かれていた。

図2によると、「子どもとの関わり」は、幼稚園、認定こども園、施設と比べて保育園において、保育者に必要な実践力として「どちらでもない」の回答が多く見られた。

また、図3のように、保育者に必要な実践力として「クラスをどうまとめるか」については、幼稚園において「とても当てはまる」の回答が際立って多く、「認定こども園」が続いている。保育園においては、「とても当てはまる」の回答が多くはあるが半数には達しておらず、「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」の回答も見られた。

図4の「文章力」は幼稚園において、保育者に必要な実践力として「とても当てはまる」が多く、幼稚園、認定こども園、施設において、「とても当てはまる」「やや当てはまる」の回答がほとんどであった。これに対して、保育園においては「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」の回答割合が同程度であり、「あまり当てはまらない」の回答もみられた。

図5の「時間の管理」は幼稚園、施設において、保育者に必要な実践力として「とても当てはまる」の回答が際立って多く、認定こども園では「やや当てはまる」「とても当てはまる」の順に回答割合が高かった。保育園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」の順に回答が多く、回答が分散していた。

図6の「障がいについての理解」は幼稚園、施設において「とても当てはまる」の回答が、保育者に必要な実践力として回答が際立って多かった。認定こども園では、「とても当てはまる」「やや当

てはまる」の回答割合がほぼ同程度であった。保育園では、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」の順に回答が多く、「あまり当てはまらない」は「どちらでもない」と同程度であった。他の勤務先に比べて回答が分散していた。

3. 養成校において育成が必要な実践力における勤務先による保育者の意識の特徴

養成校において育成が必要な実践力についての各項目の回答について、勤務先により「保育園群」「幼稚園群」「認定こども園群」「施設群」の4群を独立変数とする Kruskal-Wallis 検定を行った。有意確率5%水準で帰無仮説が棄却された項目は50項目中、「嘔吐や便の処理」「保育の流れの理解」「クラスをどうまとめるか」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」「記録の作成の仕方」「言葉遣い」「障がいについての理解」「保育者自身の健康管理」「見通しをもった保育力」の9項目であった。項目ごとのp値と中央値を表3に示した。

表3 養成校において育成が必要な実践力の4群の差についての Kruskal-Wallis 検定の結果

	項目内容	p 値	中央値
項目 2	嘔吐や便の処理	.016*	4.00
項目 3	保育の流れの理解	.032*	4.00
項目 9	クラスをどうまとめるか	.000***	5.00
項目 17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方	.047*	5.00
項目 20	記録の作成の仕方	.015*	4.00
項目 22	言葉遣い	.003**	5.00
項目 24	障がいについての理解	.014*	5.00
項目 29	保育者自身の健康管理	.050*	5.00
項目 50	見通しをもった保育力	.017*	5.00

※ p ≤ .001 は***, p ≤ .01 は**, p ≤ .05 は*を付す。

Kruskal-Wallis 検定の結果に差が認められる9項目について得点分布を比較して特徴を検討した(図7～図15)。

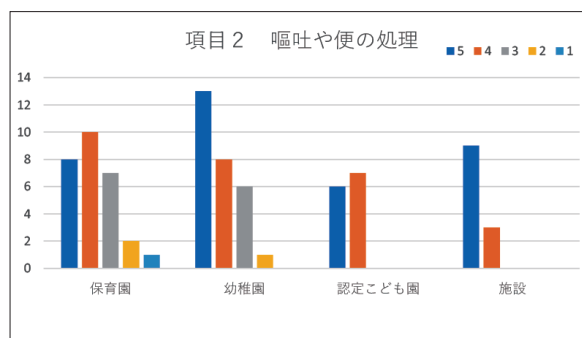


図7 養成校で育成が必要な実践力「嘔吐や便の処理」の勤務先ごとの度数分布

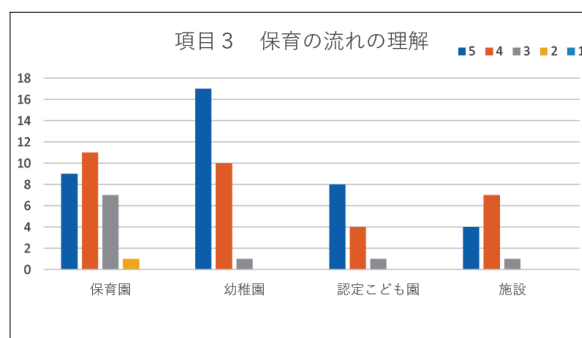


図8 養成校で育成が必要な実践力「保育の流れの理解」の勤務先ごとの度数分布

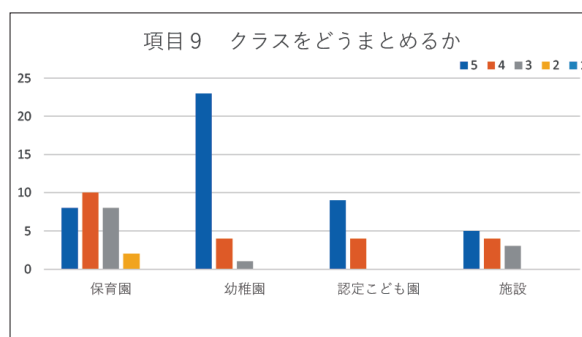


図9 養成校で育成が必要な実践力「クラスをどうまとめるか」の勤務先ごとの度数分布

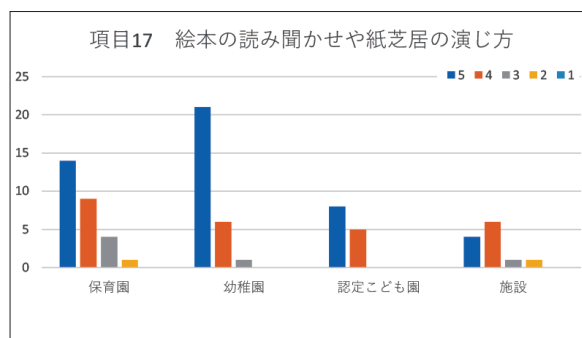


図10 養成校で育成が必要な実践力「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」の勤務先ごとの度数分布

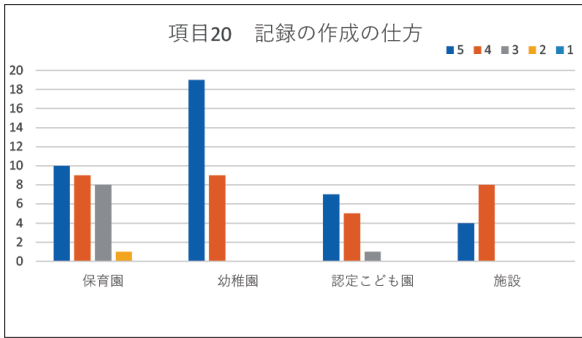


図11 養成校で育成が必要な実践力「記録の作成の仕方」の勤務先ごとの度数分布

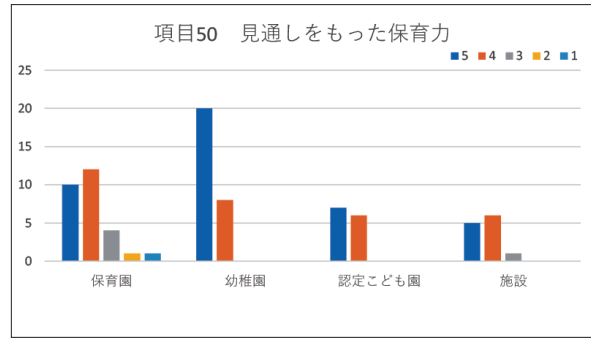


図15 養成校で育成が必要な実践力「見通しをもった保育力」の勤務先ごとの度数分布

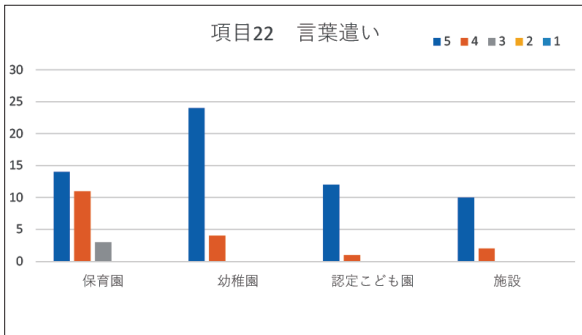


図12 養成校で育成が必要な実践力「言葉遣い」の勤務先ごとの度数分布

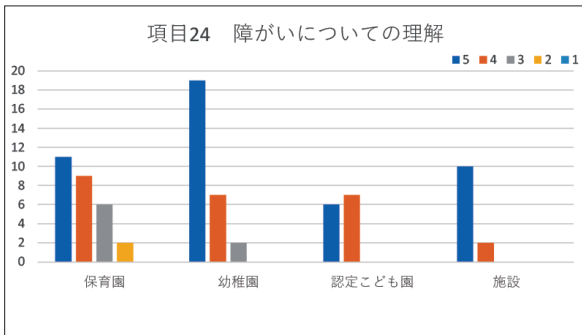


図13 養成校で育成が必要な実践力「障がいについての理解」の勤務先ごとの度数分布

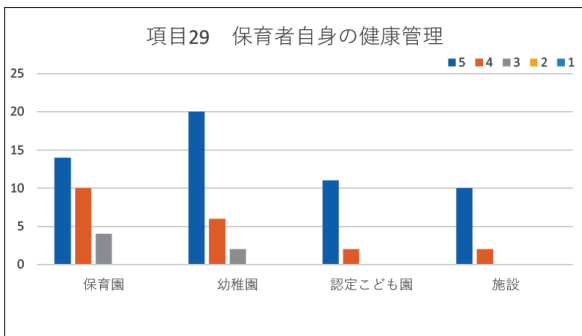


図14 養成校で育成が必要な実践力「保育者自身の健康管理」の勤務先ごとの度数分布

図7の「嘔吐や便の処理」の養成校で育成が必要な実践力では、施設で「とても当てはまる」の回答割合が際立って高かった。認定こども園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」が同程度で高かった。保育園、認定こども園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」に回答が分かれていた。

図8の「保育の流れの理解」について、養成校で育成が必要な実践力と考えるかの回答では、幼稚園と認定こども園では、「とても当てはまる」が最も多く、次に「やや当てはまる」であり、「どちらでもない」はごくわずかであった。施設では「やや当てはまる」が高く、次いで「とても当てはまる」であり、「どちらでもない」はごくわずかであった。保育園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に回答がわかれ、わずかではあるが「あまり当てはまらない」の回答も見られた。

図9の「クラスをどうまとめるか」の養成校で育成が必要な実践力では、幼稚園で「とても当てはまる」の回答割合が際立って高かった。次に「認定こども園」の「とても当てはまる」の回答割合が高い。保育園、施設は「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に回答が分散し、保育園ではわずかに「あまり当てはまらない」の回答も見られた。

図10の「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」の養成校で育成が必要な実践力では、施設では「やや当てはまる」が高く、次に「とても当ては

まる」であった。保育園、幼稚園、認定こども園では、「とても当てはまる」が最も多く、次いで「やや当てはまる」であった。保育園では「どちらでもない」の回答もあり、わずかではあるが「あまり当てはまらない」の回答もあった。

図 11 の「記録の作成の仕方」の養成校で育成が必要な実践力の回答では、施設は「やや当てはまる」が高く、次いで「とても当てはまる」であった。保育園、幼稚園、認定こども園では、「とても当てはまる」が最も高く、次に「やや当てはまる」であった。幼稚園では際立って「とても当てはまる」が高かった。認定こども園では、わずかに「どちらでもない」の回答が見られた。保育園は「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」の回答数の差が小さく、またわずかではあるが「あまり当てはまらない」の回答も見られた。

図 12 の「言葉遣い」の養成校で育成が必要な実践力としての回答は、幼稚園、認定こども園、施設では「とても当てはまる」の回答割合が際立って高く、次に「やや当てはまる」であった。保育園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に回答割合が高かったが、「とても当てはまる」と「やや当てはまる」の差は小さかった。

図 13 の「障がいについての理解」の養成校で育成が必要な実践力としての回答は、幼稚園、施設において「とても当てはまる」が際立って高かった。認定こども園では「やや当てはまる」が最も高く、次いで「とても当てはまる」であった。保育園では、回答割合が高い順に「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」であったが、それぞれの間の差は少なかった。わずかではあるが、「あまり当てはまらない」の回答もみられた。

図 14 の「保育者自身の健康管理」の養成校で育成が必要な実践力としての回答は、幼稚園、認定こども園、施設で「とても当てはまる」の回答割合が際立って高かった。保育園においては、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちら

でもない」に回答が分散していた。

図 15 の「見通しをもった保育力」の養成校で育成が必要な実践力としての回答は、幼稚園で「とても当てはまる」の回答割合が際立って高かった。保育園、認定こども園、施設では「とても当てはまる」と「やや当てはまる」の回答割合の差がわずかだった。保育園ではわずかではあるが、「あまり当てはまらない」「全然当てはまらない」の回答も見られた。

考察

1. 保育者に必要な実践力における勤務先による保育者の意識の特徴

50 項目中、保育者に必要な実践力について、勤務先による有意な差が見られた項目は 6 項目、有意な差が見られなかった項目が 44 項目であり、勤務先に関わらず、保育者に必要な実践力についての意識は共通している点が多いことが確認された。

有意差が見られた項目は「ピアノの弾き歌い」「子どもとの関わり」「クラスをどうまとめるか」「文章力」「時間の管理」「障がいについての理解」の 6 項目であった。

「子どもとの関わり」「クラスをどうまとめるか」の 2 項目は勤務先による回答の分布が似ていた。いずれも「とても当てはまる」の割合が幼稚園で最も高く、認定こども園、施設においても「とても当てはまる」の割合が高い傾向が見られた。保育園では、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に回答が分散し、「クラスをどうまとめるか」では「あまり当てはまらない」の回答も見られた。

「子どもとの関わり」の回答について、幼稚園、認定こども園、施設では、子どもや利用者との関係を保育者としての実践力とする意識が高いことが分かった。保育園において回答が分散している理由として、保育園における保育士の仕事について、全国保育士会⁴⁾の「保育士の仕事について」で「保育士の仕事は子どもたちと直接関わること

だけではなく、子どもの様子を保育日誌などの記録にとることや、子どもの健やかな育ちのために、保護者や他機関との連携をとることも重要な仕事です。」とあるように、子どもたちと関わる以外の仕事の割合も多いことが考えられる。また、保育園では、勤務体制（常勤、非常勤、パート職員など）や仕事の分担（主担当、サブ担当、補助）など、複数の職員が働いている中で、「子どもとの関わり」以外の業務の割合が高い職員の回答内容の結果への影響が考えられる。

「クラスをどうまとめるか」の回答について、幼稚園や認定こども園においては、4歳児、5歳児のクラスでは一人担任が多く、クラスや学年を基本単位とした保育活動が多い。回答した保育者も、幼稚園、認定こども園において担任業務の経験がある者が多いと考えられる。また、施設においても棟や階を単位としている場合が多く見られ、これがクラスをどうまとめるかの「とても当てはまる」の回答を高めていると考えられる。これに対して、保育園では複数の職員が関わることや異年齢児の関わりが多い。このため、回答が分散したことが考えられる。

また、「時間の管理」「障がいについての理解」の2項目の、勤務先による回答の分布も似ていた。幼稚園、施設では「とても当てはまる」の回答割合が高かった。これに対して、保育園では回答が「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」に回答が分散し、認定こども園では「とても当てはまる」と「やや当てはまる」に回答が分かれていた。

「時間の管理」の回答について、時間を区切って活動の進められる場面の多い幼稚園、施設で「とても当てはまる」が高くなっている。保育園は小規模保育や乳児クラスなど、時間を区切った活動よりはその日の子どもの状況に合わせた保育を行う場合もあることから、回答が分散したと考えられる。認定こども園では「どちらでもない」「あまり当てはまらない」の回答は見られず「時間の管理」は保育者の実践力として必要としていられると考えられる。

「障がいについての理解」は集団で同じ活動を進めることが多い幼稚園では、障がいの理解によって活動の進め方の工夫を行う必要を意識して、保育者の実践力として回答が高かったと考えられる。施設においては、利用者一人一人の特徴の理解がより求められ、その中で障がいの理解は重要であることが反映されている。保育園では、常勤職員、非常勤職員、パート職員などの勤務体制や分担の異なる職員が存在することから、障がいのある子どもとの関わりをあまり持たない職員もあり、回答が分散したと考えられる。認定こども園では「あまり当てはまらない」の回答は見られず、「どちらでもない」もわずかであり、「とても当てはまる」「やや当てはまる」と回答しており、「障がいの理解」は保育者の実践力として必要と考えられているといえる。

「ピアノの弾き歌い」は幼稚園、認定こども園では保育者に必要な実践力に「とても当てはまる」「やや当てはまる」に回答が集中している。園における保育においてピアノを活用することが多いことを反映している。保育園では、「やや当てはまる」「どちらでもない」の回答が多かった。保育園の乳児クラスではピアノを使用した活動はあまり行われず、園によってはピアノを使用しないで音楽表現活動では主にCDを使用する園も見られる。また、常勤職員、非常勤職員、パート職員などの勤務体制や分担の異なる職員が存在するなか、ピアノを弾かない保育者もいることも結果に反映していると考えられる。施設では回答が分散しているが、これは施設によって活動内容が異なることによると考えられる。

「文章力」は幼稚園、認定こども園、施設で「とても当てはまる」「やや当てはまる」の回答が多かった。保育園のみ「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」に回答が分散していた。保育園においては、常勤職員、非常勤職員、パート職員などの勤務体制や分担の異なる職員が存在するなか、その立場によって文章力を必要とする業務を担当するかどうかの違いがあり、回答の分散が見られた

と考えられる。

2. 養成校において育成が必要な実践力における勤務先による保育者の意識の特徴

50項目中、養成校において育成が必要な実践力について、勤務先による有意な差が見られた項目は9項目、有意な差が見られなかった項目が41項目であり、勤務先に関わらず、養成校において育成が必要な実践力についての意識は共通している点が多いことが確認された。

有意差が見られた項目は「嘔吐や便の処理」「保育の流れの理解」「クラスをどうまとめるか」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」「記録の作成の仕方」「言葉遣い」「障がいについての理解」「保育者自身の健康管理」「見通しをもった保育力」の9項目であった。

「保育の流れの理解」「記録の作成の仕方」「見通しをもった保育力」の3項目は、勤務先による回答の分布が似ていた。いずれも幼稚園においては「とても当てはまる」の回答が非常に多かった。認定こども園、施設では、「とても当てはまる」「やや当てはまる」の割合が高かった。保育園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に回答が分散し、「あまり当てはまらない」の回答もわずかではあるが見られた。

幼稚園と認定こども園では、保育者にとって、担任として担当クラスの活動を進めていくという意識と、それに伴う行動の重要性が高いことから、「保育の流れの理解」「記録の作成の仕方」「見通しをもった保育力」の「とても当てはまる」の回答が多いと考えられる。施設勤務の保育者にとっても、「保育の流れの理解」「記録の作成の仕方」「見通しをもった保育力」は養成校での育成を期待する項目であるが、利用者の状況による柔軟な対応がより重視される職場もあり、「とても当てはまる」と「やや当てはまる」に回答が分かれたと考えられる。保育園では、園の規模に違いがあり、また乳児クラスや一時保育を担当する保育者もあり、また複数の保育士が一日の保育を担当する保育園の特性から、これらの項目での回答が分

散したことが考えられる。

また、「嘔吐や便の処理」「障がいについての理解」の2項目は、いずれも、施設では「とても当てはまる」の回答が高く、生活介助を行う必要がある施設勤務の保育者は、これらの点について、養成校での育成は必要な実践力と考えていると言える。保育園、幼稚園、認定こども園で勤務する保育者の回答は分散しており、担当する年齢やこれまでの勤務における個々の保育者の体験により、養成校での育成の必要な実践力と考えるかどうかは異なると考えられる。

さらに、「クラスをどうまとめるか」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」の2項目の勤務先による回答の分布は似ていた。幼稚園では「とても当てはまる」の回答が非常に高く、認定こども園では「とても当てはまる」に次いで「やや当てはまる」の回答も高い。保育園、施設では回答が「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」に分散し、「あまり当てはまらない」の回答もわずかであるが見られた。

幼稚園、認定こども園の保育活動においては、クラスをまとめる力が求められ、絵本の読み聞かせや紙芝居を演じる場面があり、養成校で育成して欲しい実践力と考えている保育者が多いと考えられる。施設を勤務先とする保育者の回答では、利用者が絵本の読み聞かせや紙芝居の実演を楽しむ機会がある施設もあり、そのような施設の保育者は「とても当てはまる」「やや当てはまる」と回答していると考えられる。保育園勤務の保育者は、園の規模、勤務する園の保育の形態、回答する保育者の担当クラスや勤務の状況により回答が分散したと考えられる。

そして、「言葉遣い」「保育者自身の健康管理」の2項目の回答の分布は似ていた。幼稚園、認定こども園、施設で勤務する保育者では、養成校で育成が必要な実践力として、ほとんどの保育者は「とても当てはまる」と回答していた。保育園では「とても当てはまる」「やや当てはまる」が多いが「どちらでもない」と回答した保育者も見られた。社会人として、また、保育者として必要と

される基本的な力であると多くの保育者が考えていることが明らかである。保育園での勤務者では、保育者に必要な実践力としてはこの2項目について他の勤務先群と回答の差が見られなかったことから、養成校で育成するというよりは、保育者を目指す学生の資質の問題であるという考えを持っている保育者がいると考えられる。さらに、「言葉遣い」については、幼稚園、認定こども園では子どもたちの手本となるような言葉遣いを心がけることが必要だと考え、施設は利用者への丁寧な言葉遣いを大切にしている。保育園は園の方針により子どもや保育者への呼び方が異なっていたり、規模によってより距離が近くなるような話し方をすることもあり、そのことも結果に影響を及ぼしている可能性がある。

3. まとめと今後の課題

本研究により、保育者に必要な実践力及び養成校において育成が必要な実践力ともに、勤務先に関わらず共通点が多くあることが確認された。

その一方、保育者に必要な実践力では「ピアノの弾き歌い」「子どもとの関わり」「クラスをどうまとめるか」「文章力」「時間の管理」「障がいについての理解」の6項目で、勤務先による差が見られた。養成校において育成が必要な実践力では、「嘔吐や便の処理」「保育の流れの理解」「クラスをどうまとめるか」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」「記録の作成の仕方」「言葉遣い」「障がいについての理解」「保育者自身の健康管理」「見通しをもった保育力」の9項目で、勤務先による差が見られた。

保育者に必要な実践力、養成校において育成が必要な実践力の両方において、保育園に勤務する保育者において、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」と回答が分散する傾向が見られた。厚生労働省⁵⁾(2019)に「各保育所等における保育は、保育所保育指針を共通の基盤としながら、各々の保育の理念や方針等に基づき、子どもの実態や家庭・地域の実情に即して行われます。また、保育

の質の向上に当たっては、各現場で、目の前の実際の子どもの姿をもとに、保育実践をより良いものにしていく取組が日常的・継続的に行われることが重要です。」とあるように、柔軟性のある保育が行われていることが考えられる。また、保育園は規模や子どもの年齢によって保育の在り方が異なり、さらに勤務体制や仕事の分担においても、複数の保育者が子どもに対応するため、保育者ごとの置かれている状況により、保育者に必要な実践力や養成校に育成を求める実践力にも違いがあることが考えられる。

幼稚園教諭の免許状と保育士資格の取得を目標とする保育者養成校としては、将来の勤務先によらずに必要なとされる保育者実践力の育成を進めると共に、就職指導においては、保育園、幼稚園、認定こども園、施設によって必要としている実践力に異なる点があることに配慮した指導を行う必要があると考えられる。また、保育園では園によって求める保育者としての実践力に違いが見られると考えられ、その点にも着目した就職志望先の決定も考慮に入れる必要がある。

付記

本研究にご協力いただいた保育者の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 前徳明子・高橋美枝(2018) 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割, 小池学園研究紀要, 16, pp21-32.
- 2) 前徳明子・高橋美枝(2019) 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅱ－インタビュー結果の分析から－, 小池学園研究紀要, 17, pp1-13.
- 3) 前徳明子・高橋美枝(2020) 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅲ－保育者を対象とした質問紙調査から－, 小池学園研究紀要, 18, pp1-13.

- 4) 全国保育士会 保育士の仕事について, 全国保育士会ホームページ掲載 <https://www.z-hoikushikai.com/oshigoto/index.html> (参照日: 2020年11月29日)
- 5) 厚生労働省 (2019) 子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～, p3.

高橋美枝 (埼玉東萌短期大学教授)

前徳明子 (埼玉東萌短期大学教授)

